伊藤整全集

第七巻

伊藤整全集

7

新潮社版

編纂
瀬沼茂樹
平野　謙
小田切　進
奥野健男

花ひらく・誘惑　他
定価三〇〇〇円
昭和四十七年十月十五日　発行
昭和四十九年九月三十日　二刷
著者　伊藤　整
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一　電話
業務東京二六六一五四一一　編
集二六六一五四一一　郵便番号
一六二　振替東京八〇八
印刷所　株式会社精興社
製本所　株式会社大進堂

伊藤整全集
—7—

© Sadako Itō
1972. Printed
in Japan.

乱丁・落丁本は，
御面倒ですが小社
通信係宛御送付下
さい。送料小社負
担にてお取替えい
たします。

伊藤整全集 第7巻 目次

花ひらく　五
あとがき―「花ひらく」の方法　一四〇
感傷夫人　一四五
あとがき　三四一
誘惑　三四三
あとがき　五三五
編集後記　瀬沼茂樹　五三七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

伊藤整全集 第7巻（小説）

花ひらく

上京

1

上り急行列車は、真夜中に仙台を過ぎた。長い客車の列は、イスにもたれて眠り込んだ客をのせて、四月はじめの寒い夜の中を、南方の東京に向って走っていた。

まだ雪のある北国から来たらしい紺の冬オーヴァーを着て、灰色の鳥打帽をかぶり、ひざにボストン・バッグを乗せた、二十歳ぐらいの青年が、三等車の片すみにいた。仙台に着くころまで、彼はひざの上に書物をひろげて読んでいたが、次第に頭がぼんやりして来たので、腕木にひじをつき、頬をささえて眠った。一時間ばかりしたころ、突然その青年は揺り起された。

「おい、おい、水野、水野君」

揺り起された水野直人の目の前に、友人谷村良吉の、セルロイド縁の眼鏡をかけた、あさ黒い、面長な顔があった。水野直人はキョトンとした。谷村は東京にいるはずであった。それなのに、いま仙台から東京へ向って、絶えず震動しながら走っている夜汽車のなかに谷村がいる。これはどういうことなのだろう。

水野はわけが分らないながら、この一年間逢わなかった谷村の顔を見ると、急になつかしさがわいて来て、涙が出そうになった。札幌を出てから三十時間ばかり、知らぬ人間のなかにすわって、水野は孤独感におそわれていたのである。谷村は言った。

「さがしたんだぜ。この列車のなかを、端から端まで三べん歩いたんだ。鳥打なんかかぶってるから分らねえんだよ」

谷村は帽子なしの髪を長くのばし、中古品らしいじみな背広を着ていて、以前とは人が変ったように大人びて見えた。

「どこから乗ったんだい？」と水野が鳥打帽の下の丸い顔をあげて言った。

「仙台だよ」

「僕は、明日の朝着くって君のところへ電報をうったんだよ」

「だから迎えに来たんじゃねえか」

やっと水野に分って来た。谷村は自分をむかえに、仙台まで汽車で来て、この急行に乗り込み、長い列車の中を三

度行ったり来たりして自分をさがしたのだ。谷村のやりそうなことだ。

——しかし、谷村でなければ、だれも自分のために、そんなことはしてくれない。

「おい坐れよ」

そう言って水野は立ち、ボストン・バッグを網棚にのせた。

「あーあ、くたぶれたよ」と言って、谷村は水野の立ったあとへどしんと腰を下ろした。そのとき、隣の窓ぎわに膝を折ってすわり込んでいた太ったおかみさんに、谷村の腰がぶつかった。おかみさんが横目でにらんだ。

「ごめんなさいよ。日本の鉄道はいま、友情のためによけいな客を一人運んでいるところですからな」

と、この若い俳優学校の生徒は、大人びた口調で言った。おかみさんは、この青年の言っていることが、どうにか分ったようで、途中から笑い顔になり、少し身体を引いたが、ひどく太っていたし、何か大事なものらしい包みを窓下のすみに押し込んでいたので、座席は少しも広くならなかった。

谷村はポケットからバットの緑色の紙袋を出し、煙草をくわえて火をつけた。

「よかったよ。君は気が変って、この汽車に乗らなかったんじゃないか、と思ったりして、心配したぜ。とにかく鳥打帽は賛成できないな。浪人組みたいで、いかんよ」

入学式がすまないうちは、大学の制帽をかぶることができないように水野は思っていた。しかしそれを口に出すのも子供らしいような気がして、彼はただ笑った。

2

「とにかく入学試験が通って、よかったな」と谷村が、通路に立っている水野に言った。

「うん」

水野はこの三月、札幌の高等学校を出て、東京の大学の試験を札幌で受けたのである。谷村は、去年上京して夜間部のある大学へ籍をおき、昼間は働いているはずであったが、夏ごろから、夜は俳優学校へ行っている、と手紙で言って来ていた。仕事と二つの学校をどういう風に処理しているのか、水野には分らない。しかし谷村は、仲間での達人だから、生活処理はうまくやっているのだろう。仙台まで往復する汽車賃だって、谷村の生活では大変なはずだが。

「なかなか立派な洋服を着てるじゃないか？」と水野は谷村の着ている背広とそのズボンの、きちんとしたプレスのあとを見て言った。

水野は心のなかの、うれしさとなつかしさを、素直に口

に出せないので、相手をひやかすようなことを言ったのである。
「これかい？」
と言って谷村は、あごを引いて自分の着ている洋服の、胸のあたりから、チョッキの辺を見下し、
「これが君、コンニチのヤナギワラ、と言っても分らなければだな、タヌキ小路の横の既製品屋か古着屋の店にぶら下っている、として考えて見たまえ。この古典的なスタイルの値打ちが俗物には分らないから、値段は生地よりもはるかに安くなってるはずだ。しかしだね、ひとたび、この僕が着用すればだよ、昭和前期にこの服を着て大蔵省に勤めていた紳士の威厳と品格が、たちまちよみがえって来る」
谷村はそう言って少し胸をそらした。水野は話の内容が分らなかったけれども、笑った。
笑いながら水野は、この友人の明るい善意、表現の才能、あふれるような生きる力に自分が暖く包まれるのを感じた。谷村は水野の二つしか年上でない。しかし早く父母を失って苦労した谷村には五六歳年上の人間の老成した風格があった。
「俳優学校のコスチュームだろう」と水野は、ズボシだと言わんばかりに言った。
「いやいや」と谷村は、大きな右の掌をひろげて、顔の前で、ゆっくり左右に振った。
「君は俳優学校ってものが、どんなものか、知らないんだ。俳優学校って所はだね、セーラー服の女学生が、キセルを片手に持って、ココ、ココナ親不孝モノガ、とお婆さんのセリフをけいこしているようなところなんだよ。こんな立派なコスチュームなんてあるものかね」
谷村の前で、大きく口をあけて眠っていた中年の商人らしい男が目を覚ました。太っちょのおかみさんも、その前にいるサラリイマンも、谷村と水野の方を見て、笑を浮べた。谷村は、自分の話が、そういう人々の注意を引いたのに気がつくと、ちょっと照れたような顔になった。
「この服はね」と彼は、前に立って、オーヴァーのポケットに両手を入れている水野の方へ身体をのり出すようにした。水野が腰をかがめると、谷村はその大きな右の掌を自分の口にあてがい、声を低くして言った。
「この服はね、さる令嬢が、父君の生前着用されたものを、僕が今日君を迎えにいくというので、特に僕のために貸してくれたものなんだ」

3

どこかの令嬢が、この谷村に亡くなった父の洋服を貸し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た、と聞いて、水野は、考えるような、微笑を浮べるような目つきになり、谷村の顔をじっと見た。

しかし谷村は気難かしい大人の表情を顔に浮べて、水野の子供っぽい好奇心を寄せつけなかった。しかし、その作った大人の表情のかげで、谷村の顔つきに幸福らしい明るさが漂っているのに、水野は気がついた。

沈黙した二人をのせて、一刻も休みなく、汽車は東京に向って、夜のやみの中を、走っていた。札幌の高等学校で、演劇部や読書会の仕事をしたとき、谷村はいつも大人で、指導者だった。東京でのこれからの生活も、この谷村がいるから、と思えば水野は気を落ちつけることができた。

しかし、修学旅行で一度見て通っただけのあの東京は、いまこの暗い夜の向うの関東平野の一角に、自分には全く分らない複雑なメカニズムを持った巨大な怪物のように、のび拡がっていて、その中に無数の燈火が輝き、車が走りまわっているだろう。

未知の世界に向う時の、胸のドキドキするような憧れと怖れとが、ハズミをつけて震動し、揺れながら、引き裂くような急速力で走る汽車の中で、水野の胸にわいた。これから自分の入る大学、学問、そして芸術、文化、職業、それらのものが、光り輝く無限の迷宮のように、二十歳の水野直人の前方で明滅した。

「内山は法学部だったね」

と、谷村が顔をあげてきいた。

「うん、そうだ。あいつは官吏志望だ」。内山は、裁判官の息子で、数学のよくできる秀才であった。水野は数学がニガ手だったので、学校ではいつも内山にかなわなかった。内山は親父が東京へ転任になるので、一家引っ越しだ、と言っていた。

水野が内山の引っ越しのことを話すと、谷村は、

「藤木ゆきさんはどうしたかね？」と言った。

「女子美術へ入ったそうだよ」と言いながら、水野の鳥打帽の下のその丸顔がすうっと赤くなった。

谷村は、それに気のつかないさまで言った。

「ふーん、呉服屋の娘が女画描きか」

藤木ゆきは、高等学校の演劇部で装置や背景を受け持っていた。快活で元気な女生徒で、皆に好かれていた。美人ではないが、色白の、目の細い、丸顔の女生徒だった。

女の友達には、男の友達にない、甘い、やさしい、微風のような感じがある。軟いものの言い方、何かを待っているような目つき、少し開けたくちびる、首のところでそろえて切った髪、それからスカートのゆれる歩きかた。

——またおれは赤い顔をしたけど、この赤面癖ってのは、大学生になっても直らないのかしら、と水野直人は、自分

に腹を立てながら胸の中で言った。
彼は、東京でまた藤木さんにあえるかも知れない、とひそかに思っていたので、藤木さんのことを聞かれて、赤い顔をしたのである。
「下宿は見つけてくれたかい？」と水野が言った。
「いや、まだだ。東京へ出てすぐ一人で下宿にポツンといられるもんじゃないよ。しばらく僕の室にいて見るんだな。電車の乗りかたから、昼飯の食いかた、君みたいなお坊っちゃんは、まごつくにきまってる。一月ばかりは、神経衰弱みたいになるんだ。そのあとで、一人でいたくなる。それまでに見つけてやるよ」

4

急行列車が深夜に停る駅でも、一人か二人ぐらい、下りる客があった。水野は少し離れたところに空席を見つけてすわった。
うとうとしたと思ったら夜が明けて、畑には青々と麦の生えているのが見えた。真白に雪でおおわれていた北海道の山野と違って、関東平野はもう春なのであった。風の中で揺れている竹林も珍しいし、杉の木立や、瓦をのせて縁側を開け放った家々の作り方も、北海道とちがっていた。あの伝統的な日本の中へ、いま自分はぐんぐん引き込まれて行くんだ、と彼は思った。
しばらくして、いくつかの大きな川を渡り、工場や場末の汚ない小さな家の続いた東京郊外を汽車は走っていた。汽車が上野の駅に止った時、水野直人は、少しアガっていた。プラットフォームから駅へ出る群集の流れと騒音の中で谷村が時々話しかけるのだが、それがちっとも聞きとれなかった。
水野直人は、ただ「うん、うん」とうなずいていた。谷村の言っていることが何にしろ、同意する外なかったから。
駅を出たところで、谷村は街を流れる自動車の群を、品定めするように見渡していたが、やがて手をあげて招いた。極めて小型のアイ色の車が二人の前に来てとまった。それは、運転手の横のイスを倒して入り、その後ろの席にやっと二人がすわれる小さな車であった。運転手は水野ぐらいの若い男で、後から見ると、えりの所にモジャモジャと髪が伸びていた。
しばらく走った所で、谷村が車をとめ、小さな帽子屋へ水野を連れて入った。
「大和大学の制帽をくれたまえ」と谷村が言った。
「へえ、お目出度うございます」と帽子屋の主人は、こちらさまで？　と言うように水野の顔を見、ツバや皮の所がピカピカ光る黒い帽子をいくつも出して来た。二月ほど前

から伸ばしかけている髪を気にして水野が赤い顔をしているのに構わず、谷村は水野の頭から鳥打をとって、ピカピカした角帽を次々と水野の頭にかぶせて見、工合のいいのをきめた。

水野が金を払って外へ出ると、彼の鳥打帽は、谷村の頭にのっていた。それは実によく谷村に似合って、もともと谷村のものであり、水野の方がちょっとのあいだ借りていたような感じがした。

アイ色の小型自動車は、まだ待っていた。乗ってから谷村は運転手に言った。

「すまん、すまん。しかし、君の方にしてもだな、会社に払う金はメーター通りでいいんだろう。国家的見地から言うとだね、客をさがして流して歩くあいだの油は、これは全くの浪費というものなんだ。こうして、ちょっと待ってくれればだね、ガソリンの輸入は減少し、かつ国民相互の融和に資すること大なるものがあるんだ」

運転手はニヤッと笑い、車は走り出した。時々道路の悪いところで水野の身体は飛び上り、新しい角帽が天井にぶつかった。その度に水野はあわてて帽子をかぶり直した。その新しい帽子はちっともしっくりした感じがしなかった。

十分ばかり走って車がとまったのは、静かな住宅街の角にある洋品店の前だった。谷村が先に立って、その店の横手の狭い戸口から入り、

「ただいま」と階段の下の障子の方に声をかけた。

「お帰りなさい。お友達にお逢いになって？」と言って、五十ぐらいの女の人が、にこにこした顔を出した。

水野はあわてて帽子をとって頭を下げた。

5

「まあ、お疲れでございましょう。お風呂へ行って、それからお食事になさったら」

そう言って、中年の婦人は、谷村のかげに立っている水野直人を、いたわるような目で、ちらと見た。

水野直人は帽子を手に持ったまま、赤くなって、だまっていた。その婦人の自分を見る目つきには、田舎の女の人たちと違う素早い動きがあって、それが都会の人だけの特殊なもののように思われた。

――ここに東京があり、東京の人がいる。それは自分に分らないものであり、手の届かないものだ。自分は言葉も習慣もちがう別の国の人間だ。

だが谷村は、すっかり東京の人になり切っている安らかさで、その婦人に答えた。

「はあ、疲れましたから、そうしようと思っています。こ

の服、すこし僕に立派すぎたようでした」
「やっぱり型がすこし古いかしら。でも、きちっと合うじゃありませんか」
「どうも服が立派すぎました。僕が三度も水野君の前を通っているのに、僕だと気がつかないんです。どこかよその紳士だと思っていたらしいんです。おかげで僕は列車の中を三度往復しました」
「ほほほ」と笑って、婦人は店の用があるらしく、いそがしそうに、また障子のかげへ去った。谷村はボストン・バッグを持ち、水野の先に立って、暗い階段を二階へ上った。左と右にふすまがある。右のふすまを開けると、四畳半の室で一間の硝子窓がある。窓の前に、机が一つと、組み立ての小さな本棚がある。
「すわってくれ。くたびれたろう」
谷村の言うとおり、水野はまだ身体が絶えず揺れているような感じがした。この畳の上が、東京で自分のすわっていい場所なんだ、という救われたような気持で、水野は足を投げ出し、固い新しい角帽をそばへ置いた。
谷村は背広を脱ぎ、水野の知っている古びた学生服に着かえてから、その背広を器用に畳み、階段の上り口へ出て、隣の室へ置いて来たようであった。
「風呂へ行こう」
谷村は机の引き出しから、せっけん箱と手ぬぐいを取り出した。水野は身体が自分のものでないように、力が抜けていて、動きたくなかったが、ボストン・バッグから洗面用具を出し、谷村について行った。
階下で下駄を借り、近所の風呂屋へ行った。二三人しか客のいない、ガランとした風呂屋で身体を洗うと、一層疲れが出た。頭がぼんやりして、眠くなってきた。室にもどると、室に食事が二人分、朝の新聞をかぶせておいてあった。食事がすむと、谷村が布団を敷いてくれた。水野が布団に横になると、谷村は室を出て行った。そのあとで水野はすぐ眠った。
大分たってから、彼は話声を聞いて目をさました。
「ただいま。僕の友人は眠ってますか？」
「ええ、まだ、やすんでいらっしゃるようよ」
谷村に答えているのは、若い女の声である。階段の上り口で話しているようであった。
「背広をどうもありがとう。おかげで、車中の人は、敬意のこもった目で、僕の通るのを見ていたようでした」
「あらまあ」
「列車の中を三度往復しましたが、だれも僕をとがめなかったし、軽べつの目を向けた人間もなかったようでした」
「あらまあ、どうして三度も？」

「水野君は鳥打帽をかぶっていて僕に分らないし、僕の方は紳士になりすぎていたんで彼に分らない」
「ほほほほほほ」と若々しい笑い声がした。

6

谷村が室へ入って来た。
「起きたかい？」
「だいぶ眠ったのかな？」
「もう夕方だよ。君の東京の第一夜だね。どこかへ出て見るかい。本屋もあるし、ストリップもある。銀座まで行って見てもいいし、古風に寄席でゆっくりするのも悪くない」
「そうだなあ。あんまり強烈なのは、なるべく後まわしにしてくれないか」
「うん。それは大体において正しい意見だ」
「おれは気が小さいんだから」
「いや、それは知ってるよ。同時にだね、気の小さい人間は気が強いということも知ってる」
水野直人が笑いながら、起きて服を着た。
谷村は窓を開いた。キーンという国鉄電車の音や、自動車の警笛が、その窓からなまなましく強く入って来た。それは、この土地では人間が落ちついてものを考えるひまはないのだ、と言っているようだった。
「東京ってのは、大変なところだよ。ぼくは一年暮らして見て、だんだん分って来たがね。東京でおっかないのは、金の力と、人間の才能ってことだ」
谷村の言うのを聞いて、水野は坐りなおし、まじめな顔になった。
「地もとから出た連中には、田舎者なんか、なんだ、と思っている自信のある奴がたくさんいる。田舎から、今ごろ何千何万と出て来るのはまた、君みたいなもので、初めはおどおどしているが、本当は、がんばりのきく、持続力を持った奴等なんだ」
「どっちが、おっかないね？」
「どっちもおっかないね」
そこで、谷村は、ふだん見せたことのない本気の、思いつめた顔をした。その顔つきが水野をおびやかした。
——おれなんかは、とてもだめかも知れない、と水野は思った。
「それで君は何をやるつもりなんだ？」と谷村が水野に言った。
谷村のこの問いを、水野は逢った初めから期待していた。そして聞かれることを怖れていた。
「わからないよ」

数学よりも語学に自信があり、谷村の仲間になって演劇部の手伝をして、戯曲を読み、演出のまねごとをした。こっそり詩も書いた。そして大学では文科を選んだ。

しかし、いまこの東京にきて、谷村の話を聞いたあとで、自分がひそかに考えていたように、学者になりたい、と口に出して言う勇気は水野になかった。

「君はどうなんだ？　昼間は図書館に働いてるのかい？学校は俳優学校に変えたのかい？」

水野は谷村の生活が気がかりであった。それにまた、谷村の方針を聞いてから自分の考を段々きめたかった。

「うん」と言って、谷村は、腕を組み、くちびるをむすび、むつかしい顔になった。

「まあ、ひとつ今夜は木村先生のとこへ行こう」と谷村が突然言った。

「木村って？」

「木村玄さ」

水野はびっくりした。著名な劇作家で評論家で翻訳家の木村玄は、高い壇の上に並んだ神々の一人のような大家に水野には思われた。

ふすまが、その時、すっと開いて、黄色い太い縞の着物を着た娘が、廊下から膳を運び入れた。

「おや美しくお召しかえですな」と谷村が言った。

娘はふき出さないように気をつけて、膳の上に顔をふせた。

7

「谷村さん、お食事」

娘は卵形にふくらんだ健康そうな頬を、すこし紅くして、しかし水野の方は見ないように、谷村に言った。

「あ、そうそう。食事をいただくのは大切なことだ」と谷村が、わざとあわてて見せるようにすわり直してから、言った。

「こちらが御当家の令嬢のヒサ子さんです。えーと、順序を間ちがえたかな。紹介のときはと、自分がわの人間を先でしたかね。とにかく、そちらが、昨日以来お騒がせしているところの、わが郷党のホープなる水野直人君です。しばらくの間、御厄介になります」

水野とヒサ子は頭を下げ合って、一緒に笑った。今度は谷村の方が照れて、少し上気していた。

ヒサ子は立っておはちを運んだ。それから給仕をしないで出て行った。

水野はほっとした。初めて逢う女の人に給仕をされたり、食事するのを見ていられたりしては大変だ、と彼はヒサ子が入って来た時から心配していたのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com